表在性卵巣妊娠の病狀と病因 *H. O. Kleine.*

(Arch. f. Gyn. 150. Bd. 2. Heft. Aug. 1932)

著者は本病の三例に就て報告せり。卵巣妊娠に表在性と濾胞内とあり、濾胞内卵巣妊娠は今日まで已に二〇〇例以上の報告あるも、表在性卵巣妊娠は甚だ稀有にして著者の三例を合して一七例に過ぎず。ケルマウネルの如きは表在性卵巣妊娠の存在を否定せる程なり。表在性卵巣妊娠に本來的表在卵巣妊娠と、濾胞上表在性卵巣妊娠とを區別す。本來的表在性卵巣妊娠の場合には着床部が卵巣黄體と遠く隔りたる所に存するか或は黄體の存在せる卵巣と反對側にあるも、濾胞上表在性卵巣妊娠の場合には黄體の上部（表面上）に着床せり、勿論黄體内に着床せるものに非ず。表在性卵巣妊娠の臨床的症狀は妊娠第一ケ月の末期又は第二ケ月の初期に脅威的腹腔内出血起ることにして、爲めに失血死を招くことあり、而して喇叭管妊娠破裂との鑑別は不可能にして開腹後始めて明かにせらるゝものなり。

著者は自家三例の實驗に基きて、一、表在性卵巣妊娠の成立を確定し、二、卵の外遊走の存在を承認し、三、出血の原因が絨毛組織の血管侵蝕なるを明かにし、四、卵巣の子宮内膜腫 Endometriose が本病發生に對し原因的關係を有することを闡明したり。（提抄）

閉經後の子宮出血とブレンネル氏卵巣腫瘍 *J. Schiffmann.*

(Arch. f. Gyn. 150. Band L. Heft. Juli. 1932)

顆粒膜細胞腫 Granulosazelltumor の場合には子宮の不整出血を起すことは已に周知のところなり。ブレンネル氏腫瘍の際には出血の有無に就て未だ明かならず。著者は子宮出血、及び子宮内膜の肥厚を伴ひし本症二例を報告し、江湖の追試を希望せり。ブレンネル氏卵巣腫瘍とはブレンネル Brenner が一九〇七年に初めて報告せしものにして、最近ローベルト、マイエル氏は之れを嚢腫型と充實型とに分類せり。嚢腫型にては嚢腫壁にブレンネル氏型腫瘍結節を見る。ブレンネル氏腫瘍に特有なる所見は結締織基質多量にして其の中に上皮細胞索を有し、基質中には所々に硝子樣變性、石灰沈着を示し、上皮細胞は分化不完全なる多形細胞より成り、而して此の上皮細胞巣は充實性なることあり或は空洞を示せ